
月夜の囁き

春生向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の囁き

【コード】

N2409E

【作者名】

春生向日葵

【あらすじ】

友達とバーベキューに来ていたフリーターの達彦が、川で拾ったのは…

金魚（前書き）

お願い

宇宙並みに広い心で読んで下さい。

金魚

寛弘5年、春…

一人の娘が、水の中に沈んで行つた。

そして…

『そんな馬鹿な…どうしてこんな事に…』

こんな事望まなかつた…

それなのに…

2008年

『達彦！そつちもういいか？』

『おう！テントはバツチりだ！』

安藤達彦は今、数名の友達と河原でバーベキューを楽しんでいる。

持って来たテントを組み立て、気の合う仲間たちとのアウトドアは、誰にとっても楽しいもの。

この日の為に、バイトも休んだ。

毎日仕事ばかりじゃ、幾ら気楽なバイト生活でも息が詰まる。人間には、息抜きが必要だ。

自然に囲まれ、目の前の川の水も澄んでいて綺麗だ。

『俺の体！マイナスイオン吸入！』

達彦は大きく深呼吸をした。

『何してるのよー！』

一緒に来ていた恋人の紗耶香が、そんな達彦を笑っていた。

『お前もやってみろよ。この空気こそ、最高のご馳走だぜ！』

『そんなの判んないよ』

紗耶香は笑いながら、バーベキューをしている仲間の所に行ってしまった。

都会育ちで、自然になんかまるで興味のない紗耶香は、達彦にとって、少し面倒な存在だった。

紗耶香は、達彦が感じる自然の美しさや大切さより、もっと即物的なものを好む。

そんな紗耶香を嫌いな訳ではないが、そんな所が、達彦を時々うんざりさせていた。

恋人って何だろう…

紗耶香を見ていると、達彦はよくそう考える。

同じ感動を味わえて、例え別の考えになっても、お互いに妥協して歩み寄れる。

恋人って、そんな感じだと思ってた。

実際、達彦が今まで付き合ってた来たのは、みんなそんなタイプだったから、それが当たり前前だと思っていた。

『達彦！早く来ないとなくなっちゃうよ！』

紗耶香の声に我に返った達彦は、もう一度深呼吸をして、バーベキューの仲間に加わった。

夕方になり、達彦たちが片付けを始めた頃、河原で遊んでいた紗耶香が達彦を呼んだ。

『達彦！早く早く！これ見て！』

手招きする紗耶香のもとへ行くと、紗耶香の足元にある岩の隙間に、小さい魚が泳いでいた。

『金魚！？何で金魚がこんなところに！？』

『知らない。誰かが捨ててったんじゃない？』

二人はしゃがみこんで、岩の間を泳ぐ一匹の魚を見ている。

『可哀想…』

紗耶香は、たいして気持ちのこもっていないような溜め息をつくど、岩を退けて金魚を川に放そうとした。

『今自由にしてあげるね…』

紗耶香の本心は、魚なんてどうでもよかった。

さつき達彦が深呼吸をしていた時、自分が笑ってしまった為に、大好きな達彦の顔がガツカリしていた。

自分には、達彦の感じるものを同じように感じる事が、どうしても出来ない。

だからせめて、この小さな魚を川に解放する事で、達彦が自分に笑顔を向けてくれたら…

紗耶香の頭の中には、魚への哀れみよりも、達彦に嫌われない為の計算しかない。

そんな紗耶香が、ひとつひとつ石をどけていた時だった。

『ちょっと待て!』

達彦に突然手を捕まれた紗耶香はびっくりした。

『お前何するつもり?』

『だってこんな狭い水溜まりにいるより、川に出た方がいいでしょ』

？』

達彦は、紗耶香の言葉に眉を潜めた。

『金魚は川じゃ生きられないよ！元々人間が作った生き物だし。川になんか出したら、すぐ他の魚の餌になるだけだろ』

紗耶香は啞然としていた。

何が気に障ったのかも判らない。

達彦はそんな紗耶香を置き去りにして、急いでみんなの所に戻り、あちこち探し回って漸くジューズの空き缶を見付けた。

空き缶の口を缶切りで外し、また紗耶香の所に戻った達彦は、川の水で中を綺麗に洗い、金魚をそつと缶の中に入れた。

『達彦、それどうするの？』

『俺が飼つ』

紗耶香はまたびっくりした。

『だって達彦の部屋水槽ないじゃん！』

『こんなところで1時間も生きられないよりマシだろ？』

達彦は紗耶香を冷ややかな目で見ると、帰り支度の終わった仲間の所に戻って行った。

現地解散して、紗耶香は達彦の車に乗ったが、『持ってる』と魚の

入った缶を持たされたきり、二人に会話はなかった。

紗耶香には、達彦が何故不機嫌なのか判らなかったが、原因が今手の中にいる魚だと思つと、達彦に見せなければよかったと後悔していた。

『こんな魚、どうせすぐ死んじゃうのに…』

ポツリと云つた紗耶香を、達彦は睨みつけた。

『俺、お前のそう云つとこ、かなりうざい』

それだけ云つと、達彦は真っ直ぐ紗耶香の家に向かった。

達彦が紗耶香の家の前で車を止め、彼女の手から缶を受け取ると、
『じゃあな』とだけ云つた。

『ちゅーは？』

キスで仲直り…

喧嘩をすると、沙耶香がよく使う手だ。

付き合いたての頃は、それも可愛いと思つていたが、時間が経つにつれ、達彦にはそれが鬱陶しくなつて行つた。

キスをねだるだけで、沙耶香は絶対に謝らない。

しょんぼりした顔のまま、目には期待の色を浮かべて見つめてくる紗耶香に、達彦は溜め息をつきながら呟いた。

『もうやめよう…別れよう』

『え？』

思ってもいなかった達彦の言葉に、沙耶香は耳を疑った。

『…どうして？』

『理由は…云わなくても判るだろ？』

沙耶香は、自分の方を見ようとしもない達彦に愕然していた。

『私の事…もう好きじゃないの？』

『…好きじゃない』

沙耶香は唇を噛み締めたまま車を降りた。

うつ向いて肩を震わせる沙耶香をチラッと見ただけで、達彦は車を発進させた。

後味は悪いが、ホツとしている自分がいる。

これでいい…

一緒にいても疲れるだけなんて、恋人とは呼べない。

信号待ちで車を停めた時、達彦は携帯電話のアドレスから、沙耶香の名前を消した。

そして、帰りにペットショップへ寄り、金魚を入れる水槽や餌を買って家に帰ると、ベッドの脇のチェストに水槽を置き、その中に金魚を入れた。

『狭くて居心地悪いかもしれないけど、他の魚に食われる心配がなだけでいいだろ?』

達彦は金魚に微笑みかけた。

慣れない場所に戸惑っているのか、金魚は水槽の中を落ち着きなく泳いでいる。

『その内、寂しくないようにしてやるからな』

達彦が買って来た金魚の餌を、パラパラと水槽に入れると、金魚は一瞬驚きつつ、小さな口をパクパクとさせて食べていた。

その夜、昼間のバーベキューで疲れて眠る達彦は、妙な夢を見た。

『私を出して…私を助けて…』

どこからか、女性のものと思われる悲痛な声が聞こえた。

木霊するように響く女の声…

『誰だ…どこにいるんだ…』

『ここから出して…私は…』

そこで目が覚めた。

何て変な夢だ…

紗耶香とあんな別れをしたからか…

それとも、ただ疲れてるだけか？

幾ら考えても判らない。

でも、その夢は毎日続いた。

あれは、誰なんだろう…

いつも姿は見えない。

声を聞く限り、声の主はまだ若いはず…

最初は、同じ夢が続く事を気味悪く思っていたが、達彦はだんだんと、声の主の事が気になって行った。

龍神池

毎日毎日、真っ白い空間の中で、全身を通して響くように聞こえる声…

『助けて…私を助けて…』

また今夜もあの夢…

『誰だ…どこにいるんだ…俺はどうすればいいんだ』

夢を見始めて一ヶ月。

声は、初めて達彦の問掛けににんえた。

『あと3日で満月…それを過ぎたら、私は二度と戻れない…私を龍神池に連れて行って…』

『満月の夜に龍神池だな？君は今どこにいるんだ！』

『私は…あなたのすぐ傍にいる…』

『すぐ傍？どう云う事だ！すぐ傍ってどこだよ！？』

『あなたの枕元…私はそこにいる…お願い…私を龍神池に…』

目が覚めた時、達彦は物凄く疲れていた。

そして、夢の声の云う通り、枕元を見てみた。でも、そこにいるのは、川で拾った金魚だけ。

達彦は、無意識に金魚に話し掛けた。

『あれは、お前か？』

金魚は、そんな達彦など目に入らないように、水槽の中を優雅に泳いでいる。

あの夢から解放されるなら、やってみよう…

達彦は、満月の夜に龍神池へ行く為の準備をした。

まず、バイトを休めるように、バイト仲間に代わって貰った。

次に、何があってもいいように、テントやランプ等のキャンプの用意もした。

準備が整い、あとはどうすればいいのか考えていた出発前夜、達彦はまた夢を見たが、それはいつもとは違う夢だった。

大きな池の前に立つ達彦の手には、金魚の入った水槽。

そのまま池の中に入ると、池は思ったより浅く、膝まで水に入った所で、水槽から金魚を池にそっと放ち、水の流れに従って、池に流れ出た金魚は、月に向かって真っ直ぐに泳いで消えた。

光の架け橋で金魚を吸い込んだ月は、ゆっくりと池に沈み、後に残ったのは静かな暗闇だけ。

『…！…！』

突然目が覚めた達彦は、虚ろな目で、じっと金魚を見た。

『夢の通りにしろって事か？』

金魚は相変わらず、達彦が与えた餌を食べながら、ヒラヒラと泳いでいる。

『何だか判らないけど、夢の通りにするからな…』

達彦は、夜になる前に出発しようと、まだ昼間の暖かい内に家を出た。

念の為、水槽を空のクーラーボックスに入れて助手席にしっかりと固定し、暖まってしまうないように、エアコンの風向きを調節した。途中で休憩を取りながら、何時間か車を走らせ、やっと龍神池に着いたのは日が沈み始めた頃。

『早すぎたか…』

達彦は池の畔に車を止め、すぐ横にテントを張った。

日が沈み行く龍神池は、水面がキラキラと黄金色に輝き、その名の通り、龍神が現れそうな神秘的な景色を作り出している。

達彦は、その美しさに心を奪われ、思わず車からカメラを出して写真を撮った。

この写真を引き伸ばして額に入れたら、素敵なポートレートになる。

達彦は何度も何度も、角度を変えては、写真を撮り続けた。

日が沈み、真つ暗になったのを見計らって焚き火をし、ランプを灯して、夢と同じ状況になるのを待った。

途中のドライブインで買ったもので食事を済ませ、もうひとつのクーラーボックスに用意しておいた水を飲んで一息ついていると、月が龍神池の真上に来ている。

そろそろかな…

達彦はズボンを太股まで捲り、水槽を持って、池に向かった。

気が付くと、水面にはうっすらと靄もやがかかっている。

達彦は恐る恐る、水に入ってしまった。

『さよならだ…帰るべきところに、帰りたいんだろ？』

達彦はゆっくり、水槽を水に沈めた。

『お前が、ここがいいって云ったんだからな…多分』

水槽の口が水に浸ると、金魚は待っていたように、池へと泳ぎ出した。

空になった水槽を手に、達彦が『さよなら』と呟いた瞬間、池の真ん中から、一筋の光が空に向かって伸びて行き、それはまるで、月に向かって手を伸ばしているようだった。

何が起きているのか理解出来ぬまま、達彦は慌てて池から出た。

目を凝らしていると、光の筋を辿るように、金魚が水面から現れ、光の中を泳いでいる。

そして、またあの声…

『ありがとう…』

その言葉と共に、光の筋にいた金魚から、一層強い光が放たれ、その眩しさで達彦が目を背けると、次の瞬間には、目の前に見覚えのない和服の娘がいた。

『ありがとう…あなたのお陰で、私は自由になれた…』

『君は…誰なんだ…』

『私は…この池に身を投げてから千年の間、ずっと魚の姿で漂っていました…』

『千年も!?!』

達彦は、その年月の長さにびっくりした。

『仕方がないのです…この池に身を投げて死んだ者は、龍神様の怒りに触れてしまう…この池は、そう云う場所なのです』

達彦は、背中がゾクツとした。

龍神池の伝説なんて知らないけれど、今日の前にいるのは幽霊だ。

『怖がらないで…私は何もしない』

彼女は、青ざめている達彦に優しく微笑んだ。

『ありがとう…あなたのお陰で、私はやっと、行くべき場所へ行かれます』

達彦は、彼女を取り囲む光が弱まっているのに気付き、思わず『あ…』と声をあげた。

『これを…あなたに…』

薄らいで行く彼女の手が、何か光るものを差し出した。

『これは、龍神池で死んだ者の魂に埋め込まれる、龍神様の鱗です。』

達彦が手に取ると、信じられない程キラキラとした鱗だった。真っ白なそれは、月の光を浴びて、何色にも輝いている。

『私からのお礼です。私たちにとってそれは、魂をこの世に繋ぎ留める足枷のようなもの。でも、生きている人にとっては、大切なお守りになってくれるはず…』

『…ありがとう』

達彦がお礼を云うと、彼女は微笑んで消えて行った。

彼女が消えた後、残ったものは、龍神の鱗と、何事もなかったように漂う静けさ。

達彦は茫然としたままテントに入り、これも夢の続きかもしれない
と考えたまま、いつの間にか眠ってしまった。

龍神

達彦の目が覚めたのは、白々と夜が明け始める頃だった。

目を擦り、大きな溜め息をつくくと、昨夜目にしたものをぼんやりと
思い出した。

あれは…夢？

達彦が水槽を探すと、テントの隅に、空っぽのまますっかり乾いて
しまっている水槽が転がっている。

枕元には、500円玉位の真っ白い鱗。

夢じゃなかったんだ…

兎も角、頭を少しスッキリさせよう…

達彦は、池の水で顔を洗おうと、テントの外に出た。
まだ少し暗いが、朝の冷たい空気が気持ちいい。

静かな水音を響かせている池の水の、刺すような冷たさも、寝起き
の顔には心地好かった。

何度も何度も顔を洗い、やっと目が覚めてスッキリしていた時、い
つの間にか達彦の目の前に、水面に映る白い陰があった。

恐る恐る顔を上げると、そこには見た事のない生き物が、じつとこ
ちらを見ていた。

龍！？…本物！？

今まで幾度となく龍は見て来た。

でもそれは、架空の生き物と云う設定で描かれた絵でしかない。それが今、目の前にいる。

『うわあああ！！』

達彦が悲鳴をあげて逃げ出した時、頭の中で声がした。

『待て！』

その声が聞こえた途端、達彦は動けなくなってしまうた。

それでも、何とか体に力を入れてゆっくり振り向くと、純白の龍は、真っ直ぐに達彦を見ている。

口を少し開け、獲物を捕えるように凝視されて、達彦は震え上がった。

食われる！！

背筋がゾクツとした達彦は、息を飲んで目だけで周りを見渡した。

何か武器になりそうなもの…

キャンプの時にいつも持っているサバイバルナイフ…

必要なかったからまだテントの鞆の中だ…

いろいろ考えを巡らせている達彦の頭で、また声が聞こえた。

『恐れるな…私は何もしない…お前を傷つけたりはしないから、もつと私の所へ来い…』

龍神…

達彦の頭に、その二文字が浮かんだ。

この池には、古くから池を護る龍神がいると、聞いた事がある。

そう云えば昨夜も…あの彼女が『龍神様』と云っていた…

ただの伝説じゃなかったのか…

達彦は、ビクビクしながら龍に近付いた。

歩くたびに音を立てる、足元のゴツゴツした石と、恐怖で荒くなっている自分の呼吸だけが、静けさの中で響いている。

『そう怖がるな…私は龍神だ…お前を食べたりはしない』

やっぱり…

達彦は改めて、大きな龍神の姿に驚き、再び息を飲んで立ち止まった。

『お前は、あの娘の魂を解き放った…』

龍神を前にした達彦の体から、完全に力が抜けてしまい、声を出す事も出来ない。

『聞け…若者よ…』

龍神は微動だにせず、不気味なまでに静かで、ただ、純白の体が水面に反射して、キラキラと光っている。

綺麗だと、達彦は妙な冷静さで素直に思った。

『あの娘には、将来を約束した想い人があった。だが娘の両親がそれを許さず、娘を別の男の元に嫁がせようとしていた。』

どうしてもそれを受け入れる事が出来なかった娘は、祝言の前夜《私の魂を、あの方の元へお導き下さい》と云いながら、自ら私の中に身を投じ、娘の死を知った娘の想い人も、悲しみに暮れてここで己の首を斬った。

もしもあの男が、娘と同じように私の中に身を投げていれば、私には二人を繋いでおく事も出来たのだが…』

そんな事が…

達彦は娘に同情した。

娘も、その恋人も、愛する人と一緒にいたくてした事が、二人の魂を却って離してしまったなんて…

『娘の気持ちは、私にも判らないでもない…だが、自ら命を絶つのは、どんな理由があろうと、決して許される事ではない…人を殺めた罪人同様、重罪として罰を与えねばならぬ。』

だからあのような姿にして、数え切れない時を越え、さ迷う運命を与えた…

娘が、自分のした事を心から悔やみ、許しを乞うまで…』

達彦は胸が痛くなった。

達彦が中学生の頃、あの娘のように、自分の手で人生を終わらせた友人がいた。

仲が良かった訳ではないから、何故そんな事になったのかは判らないが、突然の事に驚き、大きなショックを受けたのを覚えている。

あいつも…きつと今頃、どこかで罰を受けてるのだろうか…

無意識に涙が頬を伝い、ふと気付くと、心なしか、龍神の目が優しくなっているような気がした。

『若者よ…お前の記憶にも…あるようだな』

龍神には、達彦の心が見えているようだ。

『友と娘が心配か？』

『…はい』

『生き歳生ける者は全て、命と云う輝きを与えられている…この世で生きる以上、命の炎が尽きるまで、どんな人生であつても生き抜かねばならん…それが、お前たちの責任でもあり、使命なのだ』

生きる事が使命…

達彦は生まれて初めて、その重大さに気付いたような気がした。

死にたいと、思った事がないとは言い切れない。

その勇気がなかっただけで、ズルズルと生きているだけだと思っていた。

自分は命を軽く見過ぎている…

あいつもきつと、そうだったに違いない…

死ぬのは、それ程難しい事ではないのだろう。

でも、それは許されない。生きる価値がないなどと、思っただけはないんだ。

それを決めるのは、少なくとも自分達ではないのだから。

『生かす事が生きる事…生きる事が生かす事…お前の友は今、あの娘が100年かかって漸く気付いた事に気が付き始め、そして深く後悔している…許されるのは、時間の問題だろう』

『許されるんですか？』

『勘違いするな…全ての者が許される訳ではない…後悔だけで許すほど、神は甘くない…』

後悔だけでは許されない…

達彦は、《ごめんで済んだら警察はいらない》と云う言葉を思い出した。

『じゃあ…あの彼女は？』

『あの娘か…あの娘は、今までずっと後悔し、死ぬ以上の苦しみを味わって来た…お前に出会うまで。』

お前には娘の声が聞こえた…そして、誰にも出来なかった事をした。

娘の魂を解放し、2つの魂をひとつにした。

お前は良い人間だ…目も心も美しい…これを受け取れ』

龍神は、達彦に顔を近付けた。

目の前に迫る龍神の大きな口…

やっぱり食われる…

達彦は思わず肩をすくめ、両目を固く閉じた。

『若者よ…いつもそれを身に着けているがいい…』

達彦がゆっくり目を開けると、いつの間にか、首に龍神を象ったネツクレスがかかっていた。

蛇のようにうねるしなやかな銀色の龍の体は、今にも動き出しそう
だ。

『それがある限り、私はお前の傍にいる…よいか…決して失くす
ではないぞ…』

『龍神様…』

啞然としている達彦を、龍神は首をもたげて面白そうに見ている。

『私が怖いかな？』

『…はい…少し』

『お前を食べはしない…だが私は、命を慈しみ、その輝きを美しい
と思えるお前の澄んだ目が気に入った。若者よ、娘から受け取った
私の鱗とその首飾りが、お前を守り、導く…決して手放すでない…
判ったな？』

『…はい』

『…忘れるな…私はいつも、お前を見ている』

『あの…龍神様…』

『何だ…』

『あの彼女は…』

『心配するでない…娘は千年の苦しみから解放され、その罪を許さ
れた。娘の想い人も…』

今頃、二人は千年振りに再会しただろう…あの二人は、もう離れな
い…例え生まれ変わってもな…』

『そうか…よかった…』

『さあ、若者よ…私はそろそろ杜に戻る…このままここにいたら、
人間の目に触れてしまうからな…』

龍神はゆっくりと後ろを向き、水の中へと消えて行った。

達彦は呆然とその姿を見送り、ぼんやりとしたまま家に戻った。

帰ってからもまだ夢の中にいるような気分だったが、スベスベとし

た龍神の鱗と、首にかかったネックレス、そして何より、空になった水槽が、全て現実だった事を物語っている。

龍神：

本当にいたのか…

ベッドに横たわり、達彦は考えていた。

自分は、もしかしたら、物凄い事を経験したのではないだろうか…

でも、きっと誰に云っても信じない…

自分自身でさえ、まだ夢なのか現実なのか判らない…

【信じる事を恐れるな…若者よ】

頭の中で龍神の声が響き、達彦は飛び上がった。

【私は伝説の存在…それでいい…お前が信じていれば、私はいつもここにいます】

『生きるって…何ですか？信じるって…何ですか？』

達彦は、ポツリと龍神に聞いた。

【生きる事は苦しむ事…だが、その苦しみを明日の己に繋げれば、苦しむ事さえ喜びになる…明日を信じる為に、お前たちは今を苦しみ、苦しみを乗り越える為に、お前たちは信じる…】

龍神の言葉は判りにくいと、達彦は思っていた。

池で話した時もそうだった。

龍神の云っている事は判らなくもないが、理解までに時間がかかる。

【若者よ…今は何も判らなくていい…私は未来のお前に話している】

そんなもんか？とも思ったが、龍神はそれっきり黙ってしまったから、それ以上は何も聞けなかった。

転生

数日後、バイトから帰ると、達彦の家の前に沙耶香がいた。

『沙耶香…』

『達彦…私…』

沙耶香は、すっかり泣き晴らした目をしていた。

あんな風に、一方的に別れを切り出せば、それも当然かもしれない。

『私…達彦が好き…どうしても、頭から離れないよ…』

達彦は、沙耶香を部屋にも入れようとしない。

その事が、沙耶香を堪らなく寂しい気分させた。

『お前さあ…もし俺が、龍に会ったって云ったら…どうする？』

『何それ…私、そんな話しに来たんじゃないんだけど』

沙耶香の目に、軽い怒りの色が浮かんた。

『いいから、何か云ってみろよ』

達彦に急かされて、沙耶香は明らかに困惑していた。

『…何て云えば、達彦は喜んでくれる？』

達彦は呆れたように、大きな溜め息をついた。

『やっぱりな…だからお前とはもう駄目なんだ。お前は、そうやっていつも計算しないと何も言えないだろ？そーゆーのって、違うと思うんだ…計算しないといけない関係って、意味判んないだろ…』

『でも達彦が好きなんだもん！嫌われたくないって思っちゃいけない？』

『だから…そーゆーんじゃないって云ってるだろ？俺はもっと、本音で付き合いたいんだよ…顔色ばっか気にするようなのは嫌なんだ』

『達彦…』

沙耶香は泣きながら達彦に抱きついた。

『大好きなんだもん…達彦…大好きなんだよ…』

『沙耶香…俺も好きだったよ…でも、もう無理だ』

部屋にも入れてくれず、抱き締めてもくれない達彦に、沙耶香は絶望した。

沙耶香の涙が、達彦のシャツにじんわりと染み込んで行く。

ひんやりとしたその感触に、達彦は少し胸が痛くなった。

別に、沙耶香が嫌いな訳ではない。

でも、別れた方がお互いの為でもある。

遅かれ早かれ、こうなっていた。

我慢して付き合えば、きっといつか、本当に沙耶香が嫌いになる…

『沙耶香…ごめんな…お互い、別な相手探そう…』

泣きやまない沙耶香の体を、達彦はそっと離して部屋に入った。

一人になった沙耶香は、残っているプライドで何とか涙を落ち着かせ、深呼吸をひとつすると、背筋を伸ばして、何事もなかったように帰って行った。

少し云い過ぎてしまったか…

でも、あれでいい…

沙耶香なら、大丈夫だ。

そう自分に云い聞かせていた時、頭の中で声がした。

【それでいい…あの娘には心がない…共に愛を育めない運命なのだ】

『龍神様…俺は…間違ってますか？』

【いいや…間違っではない…だが、正しい訳でもない…』

達彦は静かに目を閉じて、龍神の言葉に耳を傾けた。

『気持ちには、形がない…形がないからこそ、人それぞれ違う…あの娘にはあの娘の思う形があり、お前にはお前の形がある…』

龍神の言葉が、達彦の胸にジワジワと染み込んで行く。

【愛は難しい…だが同じ形は、必ず見付かる…お前はただ、それを信じればいい】

そうか…

求めるものも、与えたいものも、人それぞれ違う…

そう云う事が…

達彦は、何となく胸がスッキリしたような気がした。

時が過ぎ、達彦はバイトを辞め、就職する事にした。

大きな会社ではなかったが、将来性のある会社で、何の経験もない達彦を、温かく仲間に加えてくれた。

覚える事は山ほどあるが、今の所は、仕事にやり甲斐を感じている。

龍神は、必要な時に語りかけてくるだけだ。

結局、龍神池での話も、龍神の話も、誰にもしていない。

あの時の龍神の鱗は、達彦の枕元にあるチェストの上に、お守り代わりに置かれ、龍神のネックレスは、龍神が云った通り、常に達彦の首にかけられていた。

特別何かがあると云う訳ではないが、守られていると云う実感はある。

不思議な強い力で支えられ、包まれているような気がしていた。

やっと仕事にも職場にも慣れて来た頃、達彦は同時期に入った契約社員の大崎陽菜が、妙に気になるようになった。

沙耶香と別れてからずっと、恋人がいなかった達彦には、久しぶりの恋の予感だった。

特別可愛い訳ではないが、いつも明るくてニコニコしていて、凄くイイコだ。

デートに誘ってみようか…

大崎さんを、もっと知りたいし…

達彦は意を決して、大崎陽菜を食事に誘ってみた。

断られるかとも思ったが、大崎陽菜は『喜んで！』と笑顔を見せた。

話してみると、好みも合うし、一緒にいても苦にならない。

それどころか、もっと一緒にいたいと思ってしまう。

達彦は何度も陽菜をデートに誘い、陽菜の事を真剣に考えるようになった。

『大崎さんが好きだ…』

達彦の胸に、そんな気持ちが芽生えるのに、時間はかからなかった。陽菜の方も同じ気持ちだったようで、達彦の職場との契約が切れて、次の職場への派遣が決まった時、離れ離れになってしまおうと思った二人は、その関係を恋に発展させた。

達彦が、陽菜との未来を考え始めた時、久し振りに龍神の声がした。

【予言が聞きたいか？】

『何の予言？』

『お前が救い、解放したあの娘を覚えているか？
あの娘は、もうすぐお前の近くに行く』

龍神のこの言葉の意味が判ったのは、陽菜からこの言葉を聞いた時だった。

『私…妊娠したかも…』

達彦は、驚きはしたが、陽菜の妊娠を心から喜んだ。

『産んでくれるんだよな？』

『いいの？』

『勿論！結婚しよう、陽菜』

『達ちゃん…』

陽菜の顔が、喜びで輝いた。

陽菜のお腹が大きくなってくる前にと、二人は入籍。

臨月が近付いた頃、龍神はまた予言した。

【娘が最初に恋をする相手を、否定してはならぬ…】

それだけで、達彦には何の事が判った。

【そなたには、判るか？】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409e/>

月夜の囁き

2010年12月13日20時51分発行